



## 「みやぎ心のケアセンター気仙沼地域センター」 が開設されました (気仙沼保健福祉事務所)

「みやぎ心のケアセンター」は、東日本大震災によって心理的影響を受けた県民の「心のケア」対策推進を目的として、昨年12月に仙台で活動を開始しました。

この4月からは、震災で甚大な被害に見舞われた沿岸部の気仙沼圏域と石巻圏域にそれぞれ地域センターを開設し、被災地において復興を目指す様々な機関、組織と連携し、一層地域に密着した取り組みが進められています。

気仙沼地域センターは、気仙沼保健福祉事務所の2階を拠点とし、精神科医師、精神保健福祉士、保健師、及び臨床心理士で構成する9人の専門スタッフが、気仙沼市、南三陸町の住民の方と一関市、登米市の仮設住宅で生活されている方々を、5年から10年の長期的視点で支援することになっています。

センターでは、住民の震災によるストレスや気分の変化、不眠など「心の健康」に関する個別相談に応じるとともに、関連情報を広報・講演活動を通じて発信します。

また、被災者の支援に携わる方々にも、支援に関する相談や研修会、専門職の派遣等を通じて具体的な援助技術や知識の提供を行います。さらに、長期の支援活動の中で生じる支援者自身の負担や疲労に対するストレスケアをするほか、支援者と共に被災者対応の活動をすることで、その支援活動を応援します。

気仙沼地域センターの丹野地域支援課長は「どのような御心配、お困り事でも気軽に御相談くだ

さい。」と、積極的利用を呼びかけています。



(心のケアセンター気仙沼地域センターのスタッフ)

## 「震災を乗り越え製材施設が再稼働」 (気仙沼地方振興事務所 農林振興部)

津波被害を受け再建に取り組んでいた丸平木材株式会社の新たな製材施設が、国の震災復興対策の一つである木材供給等緊急対策事業を導入して今年3月に完成し、4月から操業を再開しました。

丸平木材株式会社は、気仙沼市・南三陸町で最大の製材工場を有していましたが、津波により近くの高台にあったいくつかの機械を残し、全ての施設が流失しました。

しかしながら、このように大きな被害を受けましたが、地域の復興や雇用の確保のためにも工場再開が必要との強い意志のもと、震災直後から再建に取り組んでいました。

再建に当たっては、人材・資材不足や人件費・資材費の高騰等、厳しい状況がありましたが、補助事業の活用や社員・取引先の協力等により、震災を乗り越え操業再開にこぎ着けました。

新たな製材施設は、津波被害を免れた高台に建設され、最新の機械や先進の乾燥機等を備えた素晴らしい施設となっています。

丸平木材株式会社は、震災前から地域材のブラ

ンド化に向け中心となって取り組んでおり、製材所の再開は地域の林業・木材産業にとって大きな希望となりました。



(操業を再開した製材施設)

### 自然保護員の委嘱について

(気仙沼地方振興事務所 農林振興部)

平成24年度自然保護員の辞令交付式を去る4月13日に開催しました。

気仙沼管内には、本県で唯一の国立公園である陸中海岸国立公園や美しい海岸部の自然に恵まれた南三陸金華山国定公園、さらには、優れた自然の風景地の気仙沼県立自然公園がそれぞれ指定されております。

優れた自然景観を有する各公園の保護と適正な利用が図られるよう勤続年数1年から最長15年の6名の方々に自然保護員を委嘱し、公園利用者に対する指導や自然公園法等に基づく監視などの巡視活動を行っております。

また、自然公園制度に関する業務に加え、野生鳥獣の保護や狩猟期間等における猟銃による事故防止に向けたパトロール、ガンカモ類の冬季生息調査など自然に関わる業務全般を担っております。



(辞令交付式の様子)

### 地域が主役、元気をつなぐ

### 「グリーン・ツーリズム」研修会の開催

(気仙沼地方振興事務所農林振興部)

気仙沼地域では各関係機関が連携して、教育旅行の受け入れをはじめとしたグリーン・ツーリズムの推進を行ってきましたが、震災を契機に取り組みへの課題や新たなニーズも生じています。

このような状況を踏まえ、農村体験、里山体験を進めてきた「八瀬・森の学校(気仙沼市)」を会場に、宮城大学事業構想学部教授の風見先生とゼミ生も招いて2月28日に研修会を開催しました。

最初に、「八瀬・森の学校」の吉田事務局長よりこれまでの取り組み状況について説明をいただいた後、風見先生から「地域資源を活かしたグリーン・ツーリズムの展開」をテーマに研修を行いました。先生からは、「地域資源とは何か」、「地域資源の発掘と商品開発」、「共同社会を支えるコミュニティビジネス」、「地域力による持続可能な里づくり」、「地域の資源力×地域の地縁力×地域の経営力」等、今後の展開を図る上でとても貴重な講話をいただきました。



(研修会の様子)

### 南三陸町歌津地区「石泉ふれあい味噌工房」が完成

(本吉農業改良普及センター)

4月5日、南三陸町歌津地区の石泉活性化センター内で、「石泉ふれあい味噌工房」の落成式が行われました。

震災前までは、地区の女性の方々はJA南三陸歌津支店の加工場で味噌造りを行っていましたが、津波によって全壊したため、ボランティア団体の支援を受けて再建しました。

工房スタッフは、震災前から味噌造りに携わっていた地元の女性たち6人。昨年7月に登米市登米町の施設で久しぶりに味噌造りを行ったことをきっかけに、再開の機運が高まり、歌津地区で震災直後から支援に当たっていたボランティア団体が女性たちの熱意に応え、建設を支援しました。

施設には、大豆を煮る圧力器、蒸し器、麴発酵機などが備えられています。工房スタッフのほか、地元住民が材料を持ち込んで作業したり、スタッフに作業を委託したりすることもできます。味噌の仕込みは、12月から5月までで、この期間外は漬け物作りや菓子製造などで施設を有効活用していく予定です。

普及センターでは、工房の円滑な施設運営や味噌の品質向上を支援していきます。



(落成式のテープカット)

### 「今年も元気に植えています！」

#### 南三陸町できくの定植最盛期

(本吉農業改良普及センター)

南三陸町は、県内有数のきく産地として輪ぎくや小ぎくの生産が盛んに行われていますが、東日本大震災による津波で農地や農機具類が被害を受け、営農再開の目処が立たない生産者も多くおり、一日も早い復旧が望まれています。

そのような中、営農再開の第一歩として、南三陸町復興組合「華」では津波被災ほ場を復旧し、露地で8月お盆出荷用輪ぎくの定植作業が始まりました。さらに、順次鉄骨ハウスを建設して、夏前には輪ぎくの施設栽培も始まる予定です。

また、JA南三陸リアス小菊栽培研究会でも、8月お盆出荷用小ぎくの定植作業が始まりました。

被災者を雇用して規模を拡大した会員もいて、「リアスの小菊」の生産量増加と被災地域の雇用の場として期待されています。

今後も普及センターでは、南三陸町のきく生産の技術向上や組織活動の支援を行っていきます。



(小ぎく定植作業中)

### 養殖の復旧第1号「ワカメの収穫が終わります」

(気仙沼地方振興事務所水産漁港部)

養殖業の復興の第1号として昨年11月から養殖がスタートしていた「養殖ワカメ」の共販取扱が5月10日に終了しました。

共販は、2月28日から始まり5月10日までに延べ10回行われ、気仙沼市と南三陸町内の数量はボイル塩蔵が1,688.4トン(平成22年対比65%)、乾燥が3.7トン(同11%)で、金額はそれぞれ1,666,983.8千円(同110%)、10,682.8千円(同22%)でした。

今期は、2年ぶりの水揚げであったことや数量が例年より少ない見込みもあったことから、単価が高騰し例年の2倍近くになり、おかげで浜は活気づき復興の後押しになりました。

共販は終了したものの、冬場の低水温や養殖開始の遅れもあって、現在もメカブの水揚げを中心に収穫作業が行われており、浜はもう少しワカメの収穫作業で賑わうようです。

ワカメの収穫は終えたものの、ボイル塩蔵や乾燥ワカメはこれから市場に出回りますので、旬の美味しいワカメ製品を堪能してみてください。

また、浜では、ギンザケとホタテガイが4月下旬から順次出荷されています。スーパーなどの店頭で見かけた方もいると思いますが、ワカメ

と合わせて三陸の海の幸をご賞味されてはいかがでしょうか。



(塩蔵ボイルワカメの芯(茎)抜き作業)

### 気仙沼・南三陸震災復興キャンペーン (首都圏誘客キャラバン)

(気仙沼地方振興事務所地方振興部)

5月5日(土)と6日(日)に、気仙沼・南三陸震災復興キャンペーン(首都圏誘客キャラバン)が東京都内で開催されました。

このイベントでは、気仙沼市内の寿司店による復興寿司やフカヒレスープの試食会が行われました。当日は多くの方が銀座Tビルに訪れ、気仙沼の美味しい食べ物を満喫していました。

5月5日(土)は、同日に開催された「銀座柳まつり」へ参加する形で、郷土芸能「大谷大漁唄込」の実演や「八瀬森の学校」によるどんぐり細工の体験などの催しを行い、多くの方が気仙沼市の郷土芸能や地域の文化を体験していました。

気仙沼・南三陸震災復興キャンペーン(首都圏誘客キャラバン)を通して、気仙沼・南三陸の東日本大震災からの復興と食材と文化の素晴らしさをPRすることが出来ました。



(キャンペーンの様子)

### 気仙沼大島に復興支援

(気仙沼地方振興事務所地方振興部)

愛知県瀬戸市の電器機器メーカーである河村電器産業株式会社から宮城県に対し東日本大震災により甚大な被害を受けた被災地を支援したいとの申し出があり、関係者間で調整を行ってきました。

その結果、河村電器産業株式会社から気仙沼大島観光協会にソーラーシステムLED照明灯が寄贈されることになり、5月11日にソーラーシステムLED照明灯寄贈セレモニーが開催されました。復興への祈りを込めた明かりが灯ることで、大島の住民の皆さまの夜間の不安解消が図られます。



(テープカットの様子)

セレモニーに併せて、河村電器産業株式会社と気仙沼大島観光協会の間で「災害時応援の包括的連携に関する協定」が締結されました。この協定は、東日本大震災からの復興支援に留まらず、今後、災害が発生した場合の支援・協力態勢を構築し、安全・安心な生活の確保と危機管理能力の向上を目的とした画期的な内容となっています。両者の連携強化により気仙沼大島の復興促進が期待されます。



(協定締結の様子)